

## 園芸試験場の平成31年度実施予定課題

研究課題名	研究内容	研究期間	予算区分	新規の別
オリジナル品種の開発				
第6期山形県りんごオリジナル優良品種の開発	地球温暖化による高温の影響により、果実品質の低下が顕著になっており、着色・栽培容易な高温適応性品種が求められていることから、高温下でも着色良好で肉質硬く日持ち性のよいものに加え、黒星病等主要病害に強いオリジナル優良品種を開発する。	30～34	県単	
第4～2期おうとう新品種の開発	早生品種を中心に収穫期を分散可能な品種、良着色性品種、硬肉品種、自家和合性品種の開発を行う。また、安定生産を可能とする強勢台木を育成する。	28～32	県単	
第7期山形県西洋なしオリジナル優良品種の開発	西洋なしの消費拡大・長期販売を目的に、消費者の需要に対応した外観の良い良食味品種を育成する。外観特性の把握や育種年限短縮化試験により、品種開発の効率化を図る。	27～31	県単	
ぶどうオリジナル優良品種の開発	高温条件下でも着色良好な赤・黒色の大粒品種、果皮ごと可食、短梢剪定栽培に適する品種を開発する。	30～34	県単	
りんどうオリジナル新品種の開発とクローン増殖技術の確立	7～8月開花(極早生・早生)の仏花向け青紫品種及び新規性の高い品種の育成のため、育種素材の収集・選抜、F <sub>1</sub> 交雑を行う。また、親系統の培養技術を確立し、優れた形質を有する個体を維持、増殖する。	29～33	県単	
県内遺伝資源を活用した加工用なす品種の育成	丸なすの代表品種である「薄皮丸なす」の食味の良さを生かしつつ、商品果率の向上、低温期の収量性向上を図った品種を育成する。	29～31	県単	
DNAマーカー利用によるおうとうの育種支援システムの開発	おうとうの主要形質に関する新規DNAマーカーを開発し、すでに開発したマーカーと共に、検出の低コスト化を図る。また、早生で大果な硬肉品種育成のための交雑親の選定や必要な実生本数を推定する技術を開発する。	29～31	県単	
第2期4L生産を目指した超大玉おうとう品種の開発	輸入おうとうや国内の他産地との差別化を図るため、4Lサイズ生産を目指した超大玉品種を開発する。	30～32	県単	
超省力・低コスト技術、軽労化技術の開発				
省力多収に向けたねぎの平床密植栽培技術の開発	高い所得を確保し、水田転換畑での栽培を推進するため、チェーンポットを利用した平床密植栽培技術を確立する。	29～31	県単	
西洋なしの産地活性化に向けた新仕立て法の開発	西洋なしの産地活性化に向け、省力的で気象災害に強く、早期多収が可能である新たな仕立て法を開発する。	30～32	県単	
ぶどうの産地活性化を目指した省力栽培技術の開発	ぶどうの産地活性化を推進するため、需要が高いワイン用ぶどうの栽培管理技術及びワイン原料を目的とした「デラウェア」の省力技術、消費者に人気の高い「シャインマスカット」の省力栽培技術を開発する。	30～32	県単	
将来の産地構造に対応したおうとう新樹形の栽培管理技術の開発	将来のおうとう経営規模拡大に向け、新樹形での収量・品質の維持技術、省力技術、および、早期成園化技術を開発する。	31～33	県単	新規
ICTを活用したアルストロメリアの環境制御技術の開発	本県の気象条件に対応した複合環境制御(日射量、飽差、CO <sub>2</sub> 施用、養液、換気等に応じた自動制御)の最適化技術の開発、品種適応性調査、開発技術の組み立て実証を行う。	31～35	県単	新規

研究課題名	研究内容	研究期間	予算区分	新規の別
高品質・多収生産技術開発				
すいかの省力化と高品質化を可能とする改良型密閉栽培技術の開発	産地規模の維持とブランド力を強化していくために、本県に適した省力的で品質・収量が安定する栽培法を開発する。	29～31	県単	
やまがた主力花き産地再生技術の開発	県内の主力花き産地の再生を図るため、置賜、庄内各産地研究室と連携して、施設花きでは、アルストロメリアとダリアについて各産地と既存作型を組み合わせた周年リレー出荷体系技術を開発する。 また、露地花きでは、ビブルナム「スノーボール」の年内出荷に向けた栽培体系を開発する。	30～32	県単	
りんご半わい性台木を活用した積雪地帯型早期成園化技術の開発	りんご産地の生産性を向上し、競争力のある「強いりんご産地」づくりを実現するため、雪害耐性と早期多収性に優れた仕立て方について実証研究を行う。	28～31	外部資金	
おうとうオリジナル新品種「山形C12号」の高品質安定生産技術の開発	大玉で着色が良いおうとう新品種「山形C12号」の普及拡大に向け、着果管理、着色管理等の高品質安定生産技術と台木利用技術を開発する。さらに、軽労的な新樹形への適応性を評価する。	30～32	県単	
秋期生産で所得向上！トマト安定生産技術の開発	地域の気象および産地の条件に合わせて夏を回避する作型(村山:中玉トマト)と夏をスムーズに経過させる作型(最上:大玉トマト)で、9月から10月に安定して収穫できる生産技術を開発する。(最上産地研究室と連携)	29～31	県単	
山形に適合した次世代(環境制御)施設園芸の実証	大規模ハウスを利用した企業的経営体の育成を想定し、大型低コスト耐候性ハウス+環境制御技術の導入によるトマトの生産性向上を実証する。	29～31	県単	
高収益ハウレンソウ周年栽培技術の開発	施設ハウレンソウは、高収益型の品目であり、複合環境制御により、ハウレンソウを年8～9回収穫可能とする、高収益型周年栽培技術を開発する。	31～34	県単	新規
積雪寒冷地におけるトマトの新たな栽培体系の確立とスマートハウスによる環境制御技術の最適化	冬定植(12月)による栽培体系について、スマートハウスを用いて環境制御の最適化技術を明らかにすることにより、本県における超多収栽培(40t/10a)体系を開発する。	31～34	県単	新規
バラのスマートハウスを用いた複合環境制御技術の確立	本県の気象条件に対応した複合環境制御(日射量、飽差、CO2施用、養液、換気等に応じた自動制御)の最適化技術を開発する。	31～33	県単	新規
流通・長期貯蔵技術開発				
さくらんぼの長期貯蔵技術の開発と「山形C12号」の輸出実証	さくらんぼの8月上旬までの長期貯蔵技術を開発する。さらに、新品種「山形C12号」の試験輸出により、輸出時の課題と対応策を明らかにする。	31～35	県単	新規
食味指標活用によるえだまめの良食味生産流通技術の確立	えだまめの良食味生産・流通を目指し、食味を向上させる栽培管理及び食味を維持する収穫後管理を明らかにする。	31～33	県単	新規
環境に優しい省エネ・温暖化対策技術の開発				
ぶどうを加害するクビアカスカシバ総合防除技術の確立	クビアカスカシバに対して、薬剤散布のみではなく、交信かく乱剤や本虫の生態、習性等からアプローチした物理的防除等を組み合わせた総合防除対策の確立を図る。	29～31	県単	
温暖化に対応した果樹・野菜・牧草・林木の適応性調査(業務)	地球温暖化の進展により、これまで栽培が不適と考えられていた作物や品種等が栽培できる可能性がある。そこで、果樹・野菜・牧草、林木について、栽培可能な作物等をスクリーニングするための栽培調査を行う。	27～31	県単	
温暖化に対応したもも栽培技術の開発	ももの多主枝形仕立てと立枯れが少ない台木を組み合わせた立枯れ防止技術及び気象変動に左右されにくい高品質安定生産技術について検討する。	31～33	県単	新規